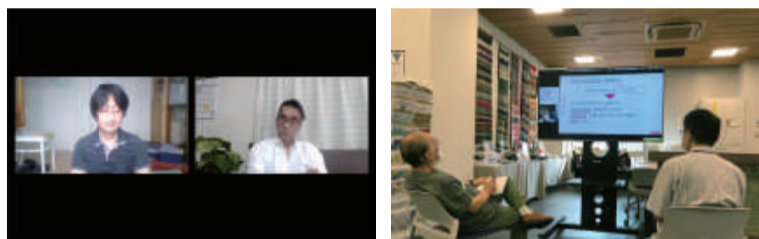


横浜ダルクに学ぶ、依存症からの回復

オンライン開催 「第2回 更生支援のための地域連携を考えるセミナー」



※ 横浜ダルク・ケア・センターのお二人は、プライバシーに配慮して、お名前とお顔は伏せさせていただいております。

本年3月に横浜市再犯防止推進計画が策定されました。私たち市民が再犯防止のためにできることを考える「更生支援セミナー」第2回は、薬物依存症をテーマに7月18日に開催しました。今回ご協力いただいたのは横浜ダルク・ケア・センター。ダルクは薬物依存症を病気と捉え、その回復を支援する民間施設です。横浜ダルクは東京、名古屋に続く3番目のダルクとして設立されました。本セミナーには全国からお申し込みがあり、限定公開の配信ながら30名を超える方にご視聴いただきました。

はじめに横浜ダルクのスタッフのお二人に、活動およびご自身の体験談をお話いただきました。お二人の体験に共通したのは、薬物使用のきっかけは誰の日常にも起こり得る些細なことだったということ。そして長らく自身の依存症を認められなかったことでした。

依存症回復をともに目指す仲間がいたから…

後半は視聴者を交えて質疑応答を行いました。「自分に向き合えるようになったのは？」との質問に「ダルクには自分を裁く人がいなかった」「もう一人で悩まないでとってもらえた」と回答されたお二人。彼らを変えたのは、同じ依存症回復を目指す仲間だといいます。ダルクの特徴は、回復を目指す利用者のもとより、スタッフも含めた全員が元・薬物依存症者という点にあります。当事者同士だからこそ、お互いの苦悩も回復の喜びも分かち合えるのです。地域連携についての質問には、横浜ダルクでは刑務所や保護観察所と連携して回復支援を行っているご紹介いただきました。ダルクの回復支援の活動が成果を挙げてきた一方、課題についても語られました。それは薬物依存症者の多くがダルク等の支援に繋がらないこと。今回お話しいただいたスタッフお二人も、ダルク入所までに長年を要したと述べられていました。

最後に、セミナー第1回の講師を務めていただいたNPO法人Hatchの細川慎一さんとNPO法人Y-ARANの市原誠さんからコメントを寄せていただきました。お二人からも、罪に問われた障害者や依存症者を支援に繋ぐ必要性和難しさが語られました。

民間による再犯防止がいわゆる以前から地道な活動を続けてきた横浜ダルク。彼らの活動から地域連携の必要性和課題が垣間見えた貴重な機会となりました。

project カウンターテーブル設置

～ スペースの雰囲気華やかになりました！～



横浜市中区石川町にあった「ひらがな商店街アートスペース『と』」。その閉店にともない、業務用冷蔵庫とカウンターテーブルを協働スペースが引き継ぎました。長年働き続けたカウンターはリメイクすることに。当初、コロナ流行下の休館期間中にスタッフで修繕する予定でしたが、ペンキは剥がれ、床板は腐食し、大掛かりな補修を要したため、この作品の生みの親

である「似て非works※」代表の稲吉稔さんに相談したところ、快く引き受けてくれました。

補修の様子を見せていただきましたが、補修の域を超え、もはや一から作り直したといってもいいほど丁寧な作業をしてくださいました。塗装には「モールテックス (MORTEX)」というベルギー製の左官塗材を使用。またガラス部分は、建築廃材のサッシガラスをクラッシュして樹脂で固めアップサイクルしたもので、アンティーク家具のような重厚な風合いを出しています。

これまでデスクに置いていた電気ケトルや食器類をカウンターテーブルへ移動し、照明部分もさっそくライトアップ。素敵にアップサイクルされたこのカウンターを囲んで、今後カフェイベントなども計画中です。地域のみなさんに愛されるよう、末長く大切にしていきたいと思ひます。



※ 作者の稲吉稔さんが代表の「似て非works」では、「元何か」から「今何か」へと移り変わるプロセス（アップサイクル）を軸に活動されています。

ことびと

趣味の域を超えたまちの三線作家
～ 比嘉さん～

今日もどこかで比嘉さんの三線が鳴り響く。時に山下公園、時に寿のまち、はたまた老人ホームにまで…。

今や「弾くことよりも作ることが生きがい」と話す比嘉さん。時間も忘れて夜中まで作り続けていることも。自身が作った三線がさまざまな人の手に渡り、三線の魅力が拡がることに喜びを感じている。

昔から手先は器用だった。沖縄出身。小学生のときにカンカラ三線を作ったが、親から仕事にならないからと止められた。中学時代、貧しい生活の中で薪を集めてお金を稼ぐ日々。卒業してすぐに酒造メーカーで働いた。17歳、沖縄を出て大阪で電気工業会社に勤めたが、重労働で心身ともにボロボロになった。仲間に誘われ東京で料理人の道へ。そこでも親方から厳しく指導され、激しい愛の鞭に耐える日々だった。それから「100回以上仕事が変わった」と話してくれた。

第一印象はシャイで無口だが、どこか温かさを感じさせる人柄。慣れてくるとおふざけモードが止まらない、陽気な沖縄のおじい。三線の音色同様、魅力的な人だ。

手づくり三線第一号は手づくり感満載のカンカラ三線だったが、今やその腕をどんどん磨き、店頭に並んでいてもおかしくないほどの出来。手にした人が見せる驚きの表情をよそに、比嘉さんは「こんな簡単なね」と話しながら、今日もせっせと三線を作る。比嘉三線の輪は、これからも広がり続ける。



※ 今回の執筆者は、元協働スペースのスタッフの一人、比嘉さんへインタビューを行いました。比嘉さんの三線作りの始まりは、10年前か、文章から伝わり、真ん中、ス。の。彼。の。一。言。が。三。線。を。作。り。た。か。比。嘉。さ。ん。へ。の。想。り。を。書。き。ま。す。

